
子犬を飼ってから乱暴が無くなり良い子に成った10歳男児

楡の会こどもクリニック

石川 丹

初めに

動物との関わりが心理療法効果を生む場合がある事は良く知られています¹⁾。
本稿では、親への屈折した愛情欲求の表現としての問題行動が子犬飼育を始めるに連れて消失した10歳男児について述べます。

受診児

10歳5ヵ月齢小学4年男児が、思い通りにならないとキレる、些細な事で友人に迷惑を掛ける、すぐ嘘を吐く、との事でクリニックを受診して来ました。

家族は父母ともに41歳で共働き、姉が二人います。

5歳の頃から癪が強く、落ち着き無く、友達によくちょっかいを出していました。父は二人の姉には優しい一方、本児には厳しく叩く躰をしていました。

小学校に入ってから落ち着きの無さと乱暴が目立つようになり、先生から授業妨害だと言われました。

4年生になってますますひどくなり、学芸会の台本に落書きして友達がそれを消したら怒ってその子の手を鉛筆で刺した。クラスメイトともめ事になってその子の給食のコップに消しゴムのカスを入れた、友人の家で友人の姉とけんかになり包丁を持ち出して脅した、などの事件を起こしました。

母は、問題を起こす度に学校から職場に電話が掛かって来て迷惑です困ります、としきりに訴えました。

心理治療

本児への“困った！”感が非常に強い母に対して、子どもの困った行動は「自分をもっと見て欲しい、分かって欲しい、気に掛けて欲しい、愛して欲しい」という屈折したアピールで、父母へすねるいじける形で表現される愛情欲求であることを説明し、事を起こした場合には頭ごなしに叱ったり体罰するのではなく、まずはこの子がやってしまったときの心情を思い巡らして父母が言語化

して語り掛け、例えば、「刺したかったんだ」「消しゴムのカス入れたくなかったんだ」「キレて包丁持ち出しちゃったんだ」と子どもの止むに止まれぬ悔しい気持ち切ない心情を父母が理解している事を伝えた後に、教え諭すように叱って下さい、と心理療法を主にした子どもへの関わり方を願いました。

経過

3週間後（10歳6ヵ月齢）；

母子で受診、母はその後学校からの電話は一度も無く、家でもすごく落ち着いていて穏やかになった、とにこやかに報告して来ました。

上述の筆者による心理治療的指導を母は実践出来たように思われました。

母が去年の学習発表会はちよろちよろしていたが今年は落ち着いて座っていたらと述べた時、同席の本人は「去年は電気係りだったから動き回った」と言って母親に反論しました。

10歳7ヵ月齢；

キレるのはなくなったが「どうせ僕なんか」とはっきりいじけるようになったと母が言いましたので、言葉で地団太を踏んでいると理解すればこの子の心が成長していることになりますと母を励ましました。

10歳8ヵ月齢；

また乱暴になってぜんぜん駄目との母の訴えでした。

学校で友達の手箱を壊した、朝起きないで車で学校に送れと言うが母は仕事があつて送れないと言うと物を投げつける、何回も職場に電話して来て「早く帰って来て」としつこく言うので迷惑だ、等でありました。

この子は母が自分の気持ちを分かってくれていると理解し、「もっと分かってくれよ」と言う気持ちが高じて母に甘えたい気持ちの表現なので、頭ごなしに拒否するのではなく、この子の気持ちを認めていることがこの子に分かるようになお一層の言葉掛けをして下さい、と説得しました。

10歳9ヵ月齢；

どんどん駄目になって来ているとの事。

道路で車の列に飛び出したので、担任の先生が聞くと「死のうと思った」と言ったとの事でした。また、1週間前にはニヤニヤしながら首を吊ろうとしたとの事でしたので、自殺未遂は相当に追い詰められていて今まで以上にすねて母を引き付けようとする行動です、と改めて説明しました。

また、母親からは本児が犬を飼いたがっているがどうしたものかという相談がありましたので、動物療法と称される心理療法があつて動物との触れ合いが心理効果を生むこともあると説明して大いに勧めました。

10歳10ヵ月齢；

母は見違えるように穏やかな表情と口調で問題は無くなったと述べました。

子犬を飼うようになって一生懸命面倒を見ていて、夜鳴きすると離乳食を作って食べさせ慰めているとのことでした。

本児に対して「犬は弟みたいなの？」と問うと首を振るので、「子どもみたい？」と聞くと『うん』と答えました。「死にたくなるのはまだあるの？」と問うと『いや』という答でした。

子犬を飼うことが児への良い心理療法に成りましたねと母に強調しました。

10歳11ヵ月齢；

春休みが終わって5年生になって1ヵ月の間に、2回学校から電話があつて友達を棒で叩いた、とのことでしたが、母の話し方は穏やかで以前のように迷惑がることはありませんでした。

11歳0ヵ月齢；

母は、犬には優しく何時もじゃれあっている、友人とのトラブルでカッカして手が出るのは無くなって良かった、とにこやかに述べました。

11歳3ヵ月齢；

母子ともに笑顔で入室、母はうれしそうに問題行動はまったく無くなったと報告して来ました。

犬の世話はやはり熱心で、大きくなった犬を力いっぱい抱きしめるので犬が苦しがる程の様子だそうでした。

母からすれば手の掛かることは初診時の10分の1に減ったが、「アイスクリーム食べて良いとかしょっちゅう職場に電話して来る」「一緒に寝ようと甘えて来る」などと以前であれば有難迷惑気味に言っていた事を隣席の本児にいつくしむような眼差しを送りながら述べました。

母が児への受容的関わりが出来るようになったので、児の好ましい行動が増えたと考えられました。

考察

叩かれて育った子が乱暴に成るのは、やられたら自分を守るためにやり返すという気持ちを育ててしまうから、です。

体罰禁止が叫ばれるのは、体罰された本人が苦痛だからだけではなく、本人がキレ易く乱暴に成ってしまうから、です。

子ども暴力行動が多くなると親は困った感が強くなりその反動として体罰が強くなるというふうに悪循環に陥ってしまうのです。

本児は小さい頃から我が強いという性格特徴のため、親にすれば言う事を聞かない子と映り体罰が多くなり、その結果暴力的に成ってしまったと言えるのです。

叩かれても叩かれても子にとって親は親ですから親を慕う気持ちますます強くなるのですが、やっぱり叩かれてしまう子どもの心の中には切ないやるせない満たされない気持が一杯ある事を親は是非とも理解して欲しいものです。

村瀬は動物との関わりが心理治療効果を生むのは動物がクライアントの自己の相対化を促す、感情を育む、親子間の感情共有体験をもたらす等のためと論じました¹⁾。

本児にあつては、満たされないまま繰り返し表出していた親への思いを子犬に注ぐことによって、結果的に親への依存が減った点が心理療法的効果の原動力となりました。

子ども自らが子犬を自分の子どもと思っていると発言したことが重要で、親との関係では子である自分を子犬との関係においては親であると位置づけ、実の親から自立した自分を対象化できた事が“自分見つけ”“自己のアイデンティティーの発見”の取りあえずの達成に相当したのです。

子どもの問題行動が減るに連れて親の“困った”感も減り、子どもへの受容的態度が増えた事も親子の心理的關係に良い結果を生んだ、と考えられました。

まとめ

幼児期から我を張るタイプの性格で落ち着きなかった子が就学後にひどく乱暴になりましたが、子犬を飼って可愛がるようになってから問題行動がなくなりました。

乱暴行為の原因は親の否定的関わりによって子どもの心の中に生じた“受容してもらえて無い”感でありました。

子犬を飼って子犬を自分の子どものようにいとおしむことが、自らの対象化と親への依存から脱却という二つの心理的効果を育み、それによって問題行動が消失したと考察しました。

引用文献

- 1) 村瀬嘉代子：子どもと家族への統合的心理療法。金剛出版、東京、2002.

付記：

個人情報については記事の主旨が損なわれない程度で変改されています。